

2012年度 白梅学園大学大学院博士課程 学位審査報告書

学籍番号： B0H005

氏名： 吉永 早苗

学位の種類： 博士（子ども学）

学位論文題目： 幼児期における音感受教育
－モノの音・人の声に対する感受の状況と指導法の検討－

論文審査委員： （主査） 佐久間 路子
無藤 隆
草野 篤子
福丸 由佳
水崎 誠（東京学芸大学）

1. 論文内容の要旨

第Ⅰ章：音感受と幼児期の音楽教育（研究の目的）

本研究では、幼児の「音（おと）感受」を、「幼児が身のまわりの音を聴いてその印象を感じ、共鳴し、感情が起こり、さまざまな連想を引き起こす」と定義し、自由な遊びのなかでの行動や表現の観察、物理的な音響測定、音声に対する感情評価などの調査をとおし、モノの音と人の声に対する幼児の音感受の状況を明らかにすることを目的としている。さらに、音感受教育（音感受の質を高める）視点から幼児期の音楽教育を検討し、その指導法を具体的に提示することを目指した。

第Ⅱ章：音環境におけるモノの音の感受

保育室の音環境と幼児の音感受の関係を明らかにするために、保育室の音環境、モノの音や場の響きの感受について、物理的な音響測定と幼児の遊び行動の観察を行った。その結果、幼児が身のまわりのモノの音や響きの複雑さに興味を持って遊んでおり、モノの音の印象を身体で感じ受けて共鳴し、複数の感覚を繋いだり、音によってモノとモノ、あるいはモノと自分の動きを繋いだりして、さまざまな連想を生じさせていることがわかった。

第Ⅲ章：音環境としての人の声の感受

人の意識や感情が音声にどのように表れ、それを幼児がどのように感受するのかについて、4種類の調査を行った。女子大生が赤ちゃん人形を抱いて童謡や遊び歌を子守唄として歌唱する場合の音声には、通常の歌唱に比べて抑揚の大きくない穏やかな歌い方や、乳児が選好する周波数域（300～400Hz）での発声傾向が確認された。保育者の声の特性や意識に関する調査では、保育士・幼稚園教諭の音声表情の多様さが示唆される結果が得られた。また、10種類の感情を込めた間投詞的応答表現の「ハイ」および、音響特性の異なる表現で発声した6種類の「おはよう」の刺激音声を作成し、それらに対する幼児の感情評

価を行った。「ハイ」の調査から、幼児は音声の表情から基本的な感情だけではなく、感情の微細なニュアンスを感受して話者の心情を想像したり、その場の状況を連想したりするなどの複雑な思考を行っていることがわかった。「おはよう」の調査では、幼児の感情判断は音楽的特徴よりも言葉の意味（挨拶だからうれしい）に関連付けられ、感情判断の精度は楽器の経験に関係しないことが示唆された。

第IV章：幼児期の音楽表現の指導についての提言—音感受教育の視点から

幼児期の特徴的な音楽活動としてのマーチングバンドの実際を音感受の視点から分析し、その問題点を抽出するとともに、第II・III章での考察に基づいて、幼児の音感受の質を高めるための指導法として、音環境のデザインおよび幼児の前音楽的な表現にみられる音感受を文化的活動としての音楽表現に繋ぐアイデアを提案した。さらに幼児の音感受到に気づくようになることを目指して行った「サウンドウォーク」と「音日記」の学生の実践を分析することにより、音を文章化することが、分析的で積極的な音の聴取と相互作用の関係にあり、豊かな音感受につながることを明らかになった。

第V章：研究の総括

幼児は音や音楽を聴いて興味を持つだけでなく、その響きの複雑さを楽しみ、音を介してさまざまに思考をめぐらせている。この音感受の質を高める音感受教育は、従来の音楽教育におけるソルフェージュ的な音楽の知覚や、サウンド・エデュケーションにおける多様な音への気づきを目指すのではなく、幼児が音や音楽を聴いて感じたり考えたりする心的なプロセスを重要視しており、幼児と環境とのかかわりにおけるダイナミズムに注目する。具体的には、音や響きとの感性的な出会いを幼児に提供する環境の構成、音楽の構造や音・声の響きを幼児が感受できる音楽表現活動における「ねらい」の明確化、保育者の豊かな感性の三側面から成る。音感受という視点をもつことで、保育者は幼児の音の感受の状況に気づき共感することができるようになり、それが保育者自身の音感受力につながっていく。すなわち音感受教育においては、音環境と幼児および保育者の三者間に、音感受向上の相互作用のサイクルが形成される。

以上、本研究によって明らかにされた幼児の音感受の知見は、幼児の音や音楽への感受性に対する理解を進展させ、幼児教育および音楽表現の指導に新たな視点を与えるものであるといえる。

2. 論文審査の結果の要旨

本論文は、幼児の音の感受に着目し、自由な遊びにおける表現行動の観察、物理的な音響測定、音声の感情評価などの調査をとおして、モノの音と人の声に対する幼児の音感受のあり方を解明し、それが幼児教育でどのように実現できるかの提言を行ったものである。特に、幼児が音についての多種多様な気づきを得ていることを見出し、そこから、「音（おと）感受」という面の幼児教育のあり方を示した点に独自性がある。音感受教育の視点から幼児期の音楽教育をとらえ直すことを実証的に提示したことが高く評価できる。

審査会においては、本論文は、幼児音楽の研究の近年の動向に沿って、それを発展させた独自性が明確であること、特に「音感教育」や「音教育（サウンド・エデュケーション）」との違いを明らかにした点が評価された。音感受教育には子どもの環境との関わりにおけるダイナミズムに注目しており、さらに大学生の「サウンドウォーク」などにも展開され

ている。それらが最終的に幼児教育への提言につながられている。このように、幼児の音や音楽への感受性の発達とそれを保育において展開すべきところを明らかにした点で、とりわけ意義深いものである。

第1回目の審査会は2012年11月15日18時に開かれた。著者のこれまでの研究を総合的にまとめていることや、音感受に注目した点やその実証性と幼児教育への提言について、高く評価された。しかし、記述の曖昧な点やデータとの対応が明瞭でないところ、統計的な処理の不適切な点などが指摘され、修正が求められた。また第4章を中心として、論文構成を編成し直すことが求められた。

第2回目の審査会は2012年12月21日18時に開かれた。第1回目の修正要求に沿ってよく修正され、筋の通ったものとなったと評価された。ただし、論文の副題や用語、図の説明などについて、いくつか疑問が出され、それについての修正を行うこととなった。

第3回の公開審査会は2013年2月14日18時半に行われた。修正を組み込んで発表がなされ、質疑についても適切な回答がなされた。最終試験では学力の確認を含め、それまでの修正が適切になされたことを認めると共に、細かい誤字等の修正が求められ、それは主査に一任された。その修正がなされることとして、博士論文として合格とされた。